

大臣も辛いよ

とんだ玉三郎

小学三年生になったばかりの星川由香里はテレビの画面を不思議そうに見ていた。そこには、おじいちゃんの姿があった。夕飯の支度に余念のない母の昌代に向かってぶっきらぼうに言った。

「おじいちゃんがテレビに映っているけど、何か悪いことしたの。『済みません』って謝っているけど」

昌代は手を止めて、振り向いて言った。

「謝ってなんかいないわよ。おじいちゃん、何も悪いことなんかしてないんだもの」

それを聞いた由香里は怪訝そうな顔をして何か言いたそうだったが、母がテレビを消すと、無言のまま二階の自分の部屋に向かった。昌代は、祖父の四苦八苦している姿を娘に見せるのは忍びなかったのだった。

テレビでやっていた国会中継の様子がリビングに降りて来た由香里の目に偶然入ったのである。それは星川芳雄が法務大臣として国会のある委員会で、野党の質問攻勢に対応している場面だった。

長い間、大臣待機組のひとりだった星川が所属している派閥の会長の財部からの電話を受け、大臣就任決定を告げられたのは一年ほど前のことであった。

お礼と挨拶のため派閥事務所を訪ねた星川に、ずっと年下だが大臣経験も豊富な財部は言った。

「星川さん、おめでとうございます。我々の派閥から二人の入閣をなんとか勝ち取ることが出来ました。大谷君は大臣経験もあり石井首相の覚えもいいため安心していましたが、星川さんは推すことは推しました。しかし、なにぶん高齢でしたので内心心配していました。でもポストをとれてよかったです」

「ところで、何大臣なのでしょうか。電話では知らせられてなかったようなので……」

財部はポストなど気にしてない。どこでもいいからとにかく押し込めばいいという態度なのだろうか。

「ポストですか、言ったと思いますが、法務大臣です。貴方には法務関係の委

員会などに携わった経験はまったくなくとも知っていましたが、そこなら空いていると言うので快く承諾しました」

どの首相も組閣直後には、いつも「今回の内閣は『適材適所内閣』だ」と言う。でも、まるで『椅子取りゲーム内閣』だ。

「そうですか。ありがとうございます。でも、せっかくなら農水大臣をやりたかったのですが……。私の地元は農家が多いですから票にも繋がります。次の選挙は出るつもりはなく、息子に後を継がせたいと思ってます。『オヤジが農水大臣をしていた』と言えば息子への票も集まりやすいので思っていたので」

「そう言わないで下さい。まだ、農水大臣を誰にしたか聞いていません。なんでも石井首相は『農水大臣はアメリカとの農産品貿易交渉をやらなければいけないのでアメリカ側と話の出来る人を据えたい』と確か言っていましたよ」

「アメリカ人との交渉なんて、私にはとても無理です。まず、英語がまったく分かりませんから、相手が何を言っているのかわかりません。法務大臣なら英語を知らなくてもいいでしょうから、法務大臣でよかったです。これでやっと地元の町長をやっていたオヤジの墓前に『大臣になれた』と報告できます。贅沢は言いません。大臣ならなんでもいいですよ」

「英語なんかの問題ではないだろう、それより、大臣は籤で決めるくらいに思っているし、そんなになりたかったのか、どうしてこんな爺さんを推さなければならぬのだろうか」と財部は派閥の会長になったときの事を改めて思い出した。

派閥の創始者でもある先々代の会長、もう九〇才は超えていた、のところに会長就任の挨拶に行った時、言われたのだった。

「星川君を是非大臣にしてやってくれ。わしがこの派閥を作ったばかりの頃、彼は他派閥からの議員の引き抜きなどで派閥拡大に奔走してくれた。出来たばかりの弱小派閥を党内第三の派閥にした影の立役者だ。県会議員からのたたき上げで目立たないし、政治的手腕はさほどでもない。しかし、人情が厚く人望もあつた。次の内閣改造が恐らくラストチャンスだ。よろしく頼むぞ」

気を取り直して、財部は言った。

「せっかく勝ち取った大臣の椅子です。しっかりと勤めてくださいね。よろしくお願ひします」

「農林水産部にいましたので農水省の役人には親しい人もいますし、多少は

わかります。一方、法務というのはまったくの素人です。法律のことなどこれから勉強します」

「そんな必要ないですよ。部下というか事務次官や局長以下の官僚に仕事のことは任せておけば彼らが適当にうまくやってくれます。大臣室にドンと構えて座っていればいいのです。それに記者などに『法務はまったくの素人』なんて絶対に言わないで下さいよ。新聞記者などに対する受け答えについては部下の官僚にどう答えるか用意させてそれを間違いなく読むようにしてください」

「わかりました。では、自分でなにもなくていいということでしょうか」

「そういう事です。役人がレクと言っていろいろ業務のことを説明しに来るでしょうが適当に聴いていけばいいです。もともと、難し過ぎてとても理解できないでしょうから。わからなくても彼らには『わかった、わかった』と言っておけばいいのです」

「わかりました」

星川はそう答えたが何が「わかった」のかさっぱり分からなかった。

「幸い、今は法務関係で注目を引くような問題はないので、安心してください。発言内容はすべて官僚に任せてください。いいですね。そんな大臣が一番、官僚に好かれるのです」

「そんなものでしょうか」

「彼らは入省以来長い間、同じことばかり専門にやっています、おまけに東大などを優秀な成績で卒業してきたエリートばかりです。我々、政治家の意見など頭からバカにしていますよ。自分の意見など言ったら腹の中で笑われます。もともと。口では『ご立派な意見です、是非これから参考にしてみます』なんて言いますがね」

それを聴き、官僚の言ったとおりにするのが大臣の役割だと、星川は理解した。

大阪のある料理屋の小部屋でのことである。大阪高検の山田検事長の送別会が高検の幹部だけを集めて少人数で行われていた。

送別会の幹事でもある検察官からの開会の挨拶があった。

「ご存じのように山田検事長は、この四月で定年を迎える東京高検の西山検事長の後任となるために大阪高検を離任の予定です。まだ、正式な発令はないので内輪の会になりますが、検事長はお忙しくこの日しか空いてないとのことな

ので、送別会を開催させて頂きました。山田検事長、一言、ご挨拶をお願いします」

「二年前、着任した時にも話しましたが、私は関西の出身でこの大阪に愛着を持っていました。二年間、いろいろとお世話になりました。やり残したこともまだまだありますが、皆さん、および、管轄地区の関西の地方検察庁の方々と検察の矜持に恥じない仕事ができたと大変感謝しております。皆さんには今後とも、不偏不党の立場でしなやかで強く、頼りがいのある検察を目指して社会へのいつそうの貢献をお願いします。ご紹介のように私は近々、東京のほうに参る予定です。お世話になりました」

検察庁は、詐欺、脱税、汚職事件などのあらゆる刑事事件の捜査を行うとともに、さらに、刑事事件の受理、裁判の結果確定した懲役刑などの執行手続や罰金などの徴収などを担う。制度上は総理大臣を含め国会議員の逮捕も可能であり、非常に大きな権限を有する組織である。その組織は階層順に、最高検察庁、高等検察庁、地方検察庁、区検察庁とピラミッド型になっている。そのトップは検事総長であり、すべての検察庁の職員を指揮監督するという強大な権限を持っている。山田のいる大阪高検は全国に八か所ある高等検察庁のひとつである。関西地方で起きた事案を取り扱う。

当初、法務省内では四月に定年退職となる東京高検の西山検事長の後任に大阪高検の山田検事長を充て、後藤検事総長が七月に定年退官した後、山田を検事総長に昇格させるという案を持っていた。また、官僚の決めた人事案を大臣が追認することが慣例になっていた。

しかし、政権寄りの考えを持つ西山を検事総長にしたいとの官邸の強い意向を受け、それには逆らえず方針を転換することとした。まず、後藤検事総長に定年前に勇退して貰い、その後任に東京高検の西山を検事総長に就任させ、東京高検の検事長の後任に大阪高検の山田を充てるという方針とした。それで後藤に定年を待たずに勇退するよう説得工作を行ってきたところであった。もちろん、この動きは現場からの反発を恐れて秘密裡に行われたものだった。

西山は四月末で定年を迎えるため、この説得工作役である法務省の岡田事務次官には強い焦りがあった。このままだと西山は定年を迎えてしまい検事総長に出来ないからである。

岡田は最高検察庁に赴き、検事総長室で後藤と対座し、困窮していきなり言った。

「後藤さん、約束が違うではないですか、貴方は『遅くとも桜が咲き出す頃までにはきっぱり辞める』とおっしゃいました。それがまだ退職願いをお出し下さらない。四月ももう半ば、桜も散りましたよ」

「俺がこのまま来月以降もここにいとどうなると思う」

「それは困ります。遅くとも今月半ばには絶対にお辞め頂かなければいけません。よくご承知でしょうが、これは石井首相や山中官房長官の意向です」

それに対して、法務省の事務次官も歴任している後藤は後輩を諭すように言った。

「俺の勇退の後に西山君を検事総長に据える。このままでは西山君は今月末には六三才に達するので定年を迎える。従って、検事総長にはなれない。西山君が官邸に覚えのいい事は皆よく知っている。また、マスコミや法曹界もそういう見方をしている。一方、最近、収賄などの政権政党がらみのきな臭い事案が増えてきた。もともと西山君もその立場になれば検察としての公正な判断を下すと思うが、こんな時期にそんな人事をやれば、検察庁の仲間や世間がどう思うかね」

「おっしゃることはよく分かります。でも、我々役人も組織のなかの人間です。我々の上司、すなわちトップにいるのは首相であり、官房長官です。組織のなかでは上司には逆らえません」

「よく分かっていると思うが、検察官はどの政党とも距離を置く不偏不党の立場に立たなくてはならない。時の政権に左右されず正義感を持ち、強い信念のもとに世間の悪事に立ち向かってきた全国の検察官のことを考えたことがあるのか、君は。政権寄りの西山君を検事総長に据えることには多くの検事たちにも異論がある。検察官全体の士気にも影響するぞ」

と眼鏡の奥から鋭い眼光で岡田を睨みつけながら言った。

「そういう声があることも、よく承知しています。法務省は検察の人事にも関与するつらい立場にあります。法務省、いや役所は首相を頂点とする組織です。上司の言うことを聞かなければ組織はうまく機能しません。そこをなんとかわかって頂きたいのです」

と机に頭を刷り着けんばかりにして懇願するのだった。

「そんなに辞めさせたいなら、警視總監にでも頼んで俺を別件逮捕でもすればいいだろう。そうすればそれを口実に俺を懲戒免職にでも出来るだろう」

と言つて苛立った後藤は席を立つて荒々しくドアを閉めて部屋を出ていった。

岡田は先輩の権幕に圧倒され、すぐごと帰っていった。報告を待っていた星川に呼ばれた岡田の大臣室に行く足取りは重かった。

どつしりと椅子に座り鷹揚に構えた星川は切り出した。

「説得は成功したのだろうね。四月に入るまで待つつもりもなかったが、桜が咲く頃までには辞めると言うので待ったんだ。『分かった。辞める』と言っただろうね」

「それが意外に頑固でして……」

「俺が直接行って、言つてやったほうがいいのか。それともテレビにでも出て『法務大臣に刃向かうバカ者が検察庁にいる』とでも一喝してやろうか」

びっくりした岡田はそれを遮って、

「そんなことは絶対にお辞めください。それこそ、政治の介入と言われて大変なことになります。今までも極秘で説得に努めてきたのですから。私の力不足で申し訳ありません」

岡田はこの大臣は三権分立の原理原則も知らないのかと唾然とした。このような人を法務大臣に据えた首相を腹立たしく思った。

「俺は検事総長が誰になつてもいいと思つている。だが、石井首相や山中官房長官が西山にしる、西山にしるとうるさくてね。困つたものだよ」

「まだ、時間があります。もう少し、待ってください」

「あまり、期待はせんが、よろしく頼むぞ。なにしろ俺のクビが掛かっているからな」

と、首に手をやりながら星川は言った。

「わかりました」

と岡田は頭を下げ、漸く開放された、級友に悪さをして先生に呼ばれた生徒が職員室から出て行くときのような心境で大臣室を後にして自室に戻った。

星川は山中官房長官に呼ばれた。内容は決まっている。また後藤の去就のことである。

「星川さん、後藤検事総長の件、どうですか。早くしないと時間がないですが」「それが……」

「岡田もなにぐずぐずしているのですかね。彼も自分のクビがどうなるかわかっているのですかね。奥の手でもなんでも使つて処理するように言えないもの

ですかね」

山中もいきなり岡田事務次官を話に出して星川のことなど相手にしてない。

年上なので言葉遣いは丁寧だが、命令調である。

「奥の手というのはなんでしようか」

「こうなったら、西山を定年に迎えさせなければいいのですよ。後藤が定年になる今年の七月まではね」

「西山の戸籍の生年月日を書き換えさせましょうか。法務大臣の指示なら、役所もいやと言わないでしょう。実は西山は四月生まれではなく八月生まれだったということにしておけば、七月より後に定年なります。これですべてうまくいきます」

星川はとっさに出たアイデアに「どうだ」と言わんばかりに得意げに言った。

官房長官は「この大臣、本当に大丈夫か。何をやり出すか分かったものではない」と思いながら言った。

「間違ってもそんな指示は出さないで下さいね。戸籍を書き換えるなどは絶対に無理です。それこそ、大問題になります」

「そうですか、我ながらいいアイデアと思っただのですが。それに公文書書き換えって最近よくやっているではないですか。ひとりの戸籍の書き換えぐらいわいわけがないと思っただのですが……」

と、星川はさも残念そうに言った。

「世の中は高齢化社会になり、今や世間では定年延長が当たり前です。そう言うって西山の定年を延長させるのです。検事総長に居座っている後藤も七月に六五才になり定年になります。そのあとに定年延長でまだ在籍している東京高検の西山を検事総長にもってくればいいのです」

説得工作がうまくいかないと石井首相に報告したときに指示された提案を山中は星川に伝えた。

「それはいい案ですね。さすが官房長官です」

「法律上の問題も大きく絡みますから、あとで野党やマスコミに突っ込まれないように慎重にやらなければなりません。どうやって延長させるかの方法を至急検討するように私から岡田法務事務次官に言っておりますが、上司である星川さんからも指示してください。もちろん、このことは絶対に口外しないでくださいね」

その指示を山中から受けた岡田は「この内閣は何でもありか、よく悪知恵を

働かせるものだ」と半ば感心、半ばあきれながら部下に過去の条文や事例、国会でのこれまでのやり取りなどを調べるように指示した。部下たちも怪訝な顔でそれを聴いていたが、皆、察しがよく「官邸からの指示」であることは公然の秘密であった。

山中官房長官は最後の切り札として西山の定年延長に向けた準備を早急に行うように法務大臣、法務事務次官に指示したことを石井首相に報告した。

それを聞いた石井は自席から立ち上がって応接用のソファに移り、山中に自分の対面に座るように促した。山中が座ると身を乗り出すようにして言った。

「しかし、『この内閣は検察の人事にもクビを突っ込むのか』という批判が当然出てくるよね。それに耐えられるだけの理論武装はさせておかなければならぬ。西山が四月生まれ、山田が九月生まれでいずれも今年定年を迎える。そして、七月に後藤が六五才になり検事総長を定年退官とはちよつと出来過ぎだね。西山と山田の誕生日が逆なら、こんな苦勞はしないのだがね。西山の親を怨むよ。もう四、五ヶ月、遅く生んでくれればよかったのにな」

「そうですね。皮肉なものですね。このアイチア、実行するとなると国会での野党の抵抗はかなり激しいものとなり、法務大臣は攻撃的になります。それを考えますと、星川を法務大臣にしたのは間違いでしたね。彼は就任後もトンチンカンな発言がよくありましたし、就任当初、野党の恰好の攻撃対象にされてましたからね。ちよつと不安です」

「仕方ないだろう。今、代えたら却って目立つだろう。財部が『どうしても俺の派閥に大臣ポストを二つくれ』と言うから。財部の派閥は総裁選で俺をバックアップしてくれた。その時に『俺が総理大臣になったらヤツの派閥に必ず大臣のポストを二つはやる』と約束したのだ。それにしても財部もあんな爺さんを推してくるなんてどうかしているよ。あの派閥にはもつとまじなのがいるのにな。財部のヤツ、女に目がないそうだから隠し子かセクハラかなにかで、星川の爺さんに弱みでも握られてるのだろう。それで『大臣になれないのならばす』とでも言われたのだろう」

「きつと、そうかもしれないですね。今でも財部は初当選を果たした女性国会議員の尻や胸を初登院した日に触ることを楽しみにしているそうですから。しかも、『これは国会の伝統的な祝賀式のひとつだ』とうそぶいているようです」

「党の要職にあるのだから、少しは自重して欲しいな。セクハラで野党議員に訴えられないようにして貰いたいものだよ。女好きも困ったものだ」

「そうですね。今はセクハラに対する世間の目は厳しいですからね。ちよっとしたことでも、フェースブックなどで叩かれますよ」

「しかし、財部も『大臣はお飾りのようなものだ』と軽く考えていたのだろうな、あの爺さんを大臣に推すとは」

「でも法務大臣は無難なポストだと思ったのですがね」

「まさか、後藤がこんなに頑固だとは思わなかったよ。だが大臣なんて官僚の作った答弁を読むだけだからな。星川も字も読めないくらいにまではまだ毫碌しているわけでもないだろう」

「それはそうですが。法務事務次官を呼んでよく言っておきます。国会でも官僚が傍に控えてサポートし万全の体制をとるようにとも」

「繰り返す言うが、このままでは西山は定年になってしまふんだよ。そうすると検察でナンバー・ツィの大阪にいる山田を検事総長に持って来ざるを得なくなる。此奴はこれまで、汚職などでは我が党に対して厳しい態度で臨んできた問題のある男だ。俺の親しい国会議員のなかにも此奴のお陰で刑務所の臭い飯を食わされた人が何人もいるよ。君も当然知っているだろうがね。それを避けるために我々の考え方に近い西山を検事総長にしなければいけない。山田がなれば下手をすればこの俺を逮捕するとも言ってくるかもしれない。俺も党内にもたくさん敵がいるからな。此奴になにか吹き込む変な奴もいるかもしれない」

「よく存じあげています。皆川なんか、雑誌などに堂々と我々の批判する論評を書いていきますからね」

党内の反主流派の急先鋒で政権に批判的で財務大臣なども経験している皆川を山中は日頃から目の敵にしていた。

「あんなのは、言わせておけばいいんだ。日本は隣の国などと違って言論の自由があると思われて、返って俺が評価される、とぐらいにしか思っていないよ。奴はいうだけで実行力がない。ほっておけばいいよ」

「まったく、同感です。ちよっと地方で人気があると頭に乗ってますよね。私もいつか痛い目に合わせてやろうと思ってましたが、そこまで深い考えがあったとは知りませんでした。恐れ入りました」

「マスコミも相変わらずうるさいな」

「特に、朝早新聞ですよ。まるで我々を攻撃することを生きがいみたいに見えるようです」

「まあ、放っておけ。購読者も随分減っているそうではないか。あれは、『朝早新聞』ではなくて、『浅はか新聞』だ。そのうちに消えてなくなるよ」

「早くそうなることを願いたいですね」

「次期、検事総長は絶対に西山だ。これで決まりだ」

「そうですね、山田のような奴が検事総長にすると政治が混乱するだけでろくなことはありません。マスコミも野党も面白半分、政治家の取り調べや逮捕を取りあげますが、その結果で世の中がよくなったなんていうことはこれまでにありませんでしたよ。皆、無責任ですよ」

「そうだよ。政治は安定が第一だ。人の噂も七五日だ。後藤が定年で退官し、西山を検事総長にする頃はちょうど東京でオリンピックをやっている頃だ。国会も閉会中だし、皆、オリンピックのことで頭が一杯、マスコミもオリンピック一色だろう。検事総長人事のことなんかみんな忘れてるよ」

相変わらず強気の石井であった。

この二人は記者会見などでは苦虫を噛み潰したような顔で質問に対応しているが、裏に回ればざくばらんな会話だ。政界を引退した後、吉本興業にでも入って政治ネタの漫才でもやれば流行りそうだ。総理・官房長官経験の漫才師は話題になるのではないか。コンビの名前は、さしずめ、ザ・カンテイとでもするか。

岡田はこれまでの公務員の定年に対する政府見解や国会の経緯などを部下に調べさせた。

その結果、次の方針で臨むことになった。

検察官も公務員である。公務員の定年延長は出来ることに法律上はなっているから、公務員規定に則って西山の定年を特別に延長させる。もともと、その条件として定年延長が認められるのは、「名人芸の持主であること、離島に勤務中であること、大型プロジェクトに参画し中心的存在であること」など具体的な例が明記はされているが、「西山検事長は特別に才能のある極めて優秀な検察官であり数々の難しい案件を切り盛りしてきた。余人をもって代え難し」とでも言うっておけばいいのだ。

取りあえず、これが、岡田等、法務省や人事院の幹部が検討して至った結論であった。この見解は、石井首相、山中官房長官にも了承されて閣議決定という過程を経て実効性のあるものとなった。これによって西山の四月の定年退職はなくなり、後藤が定年を迎える七月を待って検事総長にする道が拓かれたのだった。

なぜだか、東京高検・検事長の発令が遅いのを訝しく思いながら、東京への引越しの準備をはじめていた時に山田は報道で事の顛末を初めて知った。

山田を東京から訪ねてきた山田シンプの検察官に吐き捨てるように言った。

「石井の奴、司法の分野まで抱き込むつもりか、それでは『気に行った法務大臣を据え、検察を恫喝するようなことをする』とマスコミなどから避難されたどこかの国の大統領と同じことをやっているだけのことでないか」

「検事総長の椅子が目の前だったのに、お気の毒です」

「俺は検事総長の椅子が欲しかったわけではない。入庁以来、同期の西山と俺は常に比較されてきた。西山はどちらかというと体制寄りだった。俺は自分では左寄りとも思わなかったが意識的に西山のやり方とコントラストをつけるようなどころがあった。もつとも、アイツと俺のやり方が交互に出れば日本の検察もバランスを保つとも思っていた」

「なんとなくわかります」

「最近まで西山とはよく酒を酌み交わしていた。少なくとも、石井が首相になるまではな。しかし、西山のやり方がだんだん極端に政権寄りになってきたように感じ始めた矢先だった。するとこんなことだ」

「東京に来て頑張ってくださいよ」

「捜査権も縛られるだろう。なにせ、トップは西山だからな」

「でも、まだ西山さんと決まったわけでもないでしょう。マスコミや法曹界からブーイングができれば二の足を踏むことも考えられますし」

「いや、これほどの奇策を弄しながら奴を検事総長にしないほうがどうかしているよ。俺は大阪で上がりだ。東京には行かないよ。幸いに俺は関西の出身だ。ここで当分、のんびりさせてもらうこととするよ。そのうちに弁護士でもやることにするよ」

「大きな騒ぎになれば公正中立な判断をしても白い眼で見られると考えると考えて西山さんが自ら検事総長の就任を辞退するのではないでしょうか。」

「奴にそれだけの矜持があればだがな。それに官邸が意地でもそうはさせないだろう」

国会では、野党はこの決定は政治的意図があると、連日のように政府を攻撃するようになった。もちろん、その矢面に立たされるのは法務大臣の星川である。野党の質問内容は事前に通告されてその回答は官僚が準備するが、答弁するのは主に担当の大臣だ。しかし、ときには即興の質問もある。星川はそのた

びに立ち往生し、審議も中断する。すると星川の後ろの席に隠れている官僚たちが紙に答弁内容をその場で走り書きしてカンニングペーパーとして差し出す。すると、野党席からヤジが飛ぶ。

「カンニングするな、落第するぞ。新米大臣、墓穴を掘るぞ」

でも、なんとか、ペーパーを読んでその場を乗り切るしかなかった。過去の答弁との食い違いを自分の子供くらいの年の議員に追及される。答弁の矛盾や間違いを指摘されると、「言い違えました、済みません」と謝る。野党議員からはまたヤジられる。

『カンニングペーパーを読み間違えました』だろう。ちゃんとしっかり読め！』

もともと急ごしらえの「定年延長措置」である。精査するとそこに綻びが出てくる。近くでハラハラしながら見ている石井首相や山中官房長官の目が気になる。見るに見かねた首相が助け船を出して代わりに答弁することもある。これではまるで出来の悪い小学生が教室で先生に質問されたようなものである。

就任した時の財務の話では法務大臣は気楽なポストだということになっていたはずだ。「大臣も大変な仕事だ、『大臣にならない』なんか言うのではなかった」と星川は後悔しきりであった。同僚の大臣たちも気の毒そうに質問攻めにあっている星川を大臣席から傍で見ている。星川もつらいと言っても、自分を推してくれた財務の手前、大臣を辞めたいなどとは言えなかった。

12

国会中継がテレビで放映されている日のことだった。野党の女性議員の質問の答弁にしどろもどろになり動揺したのか、星川の老眼鏡が外れ、それが床に落ちてしまった。眼鏡が外れたことも気が付かず、書いてある答弁メモを読むとしたが、文字がぼんやりとしか見えなくなってきた。よきよきよきよきよき、同僚の大臣が眼鏡を拾ってくれた。それを手渡され、賭け直して汗を拭きふき、どうにか答弁して事なきを得たのであった。

そのテレビ中継を見ていたのか、選挙区にいる後援会の会長からその夜にメールがあった。星川にとっては県議会議員だったところからの知己である。

「星川さんも大変ですね。後援者から差し入れのあったスッポンを生きのまま送りますから、生き血を吸って、元気をつけて頑張ってください。野党の奴らなんかに決して負けないください。奴らはただ吼えるだけです。ここはひたすら我慢です」

国会議員になれたことも出来過ぎだったが、まさか大臣にまでなれるとは思

わなかった。星川にとって、誰が検事総長になろうと知ったことではなかったが、早く決着して欲しかった。有り難いと言っては厚労大臣に叱られるがこれまでになかった新型の感染症が蔓延し出したとのことで、野党もそれに対する政府の対応を追及するようになり、矛先が厚労省のほうに変わったのでちよつとホットした。

西山がその新型の感染症に罹って重篤となり幸い命はとりとめたものの長期入院が必要となり再起不能になったのは、野党の矛先が検事長の定年問題から感染症騒ぎのほうに移り出してしばらくしてからのことだった。石井首相や山中官房長官の落胆は大きかったが、星川にとってはどうでもよいことだった。

(了) (11272字)

これはフィクションです。